

曾我蕭白筆「虎溪三笑図」の表現と主題に関する一考察

板橋区立美術館

印田由貴子

「虎溪三笑図」（千葉市美術館所蔵）は、曾我蕭白の晩年期の水墨山水画のなかでの基準作とされている。先行研究において本作は、一見したところでは山水図だが、実は故事人物図であり、機知と遊戯心を媒材として、作者と鑑賞者とが同質の知的基盤をもって主題を探り合う「山水兼人物画」として評価されている。また、画法・画風については、晩年期における他の山水図と同様に「直線を駆使し、墨の濃淡を付けて描き込む」もので、全体としての「硬質化」が指摘されている。しかし、本作の表現の詳細については分析されておらず、主題との関係についても触れられていない。

本作には、蕭白の水墨山水のなかでも、特異といえる表現が多々見られる。筆の動きを感じさせない硬質な輪郭線は、蕭白の水墨山水における基本的な要素のひとつであるが、本作ではそれが遠景にまで用いられている。近濃遠淡の原則も遠景では無視されて、画面の最奥の山よりも、ひとつ手前の山の墨色の方が薄い。白い雲烟が、近景に近いところから湧き上がるのも異例である。全体を見ると、このような描法が採られた理由が理解される。画面を埋め尽くすように配された山々には、それぞれ微妙に異なる皴法と墨色が施されており、近景の岩も左右で微妙に異なっている。雲烟と樹木は、これらを区切るように配されている。このような方法によって、画面はそれぞれの部分に分割され、それらが折り重なるように画面空間を形成しているのである。以上の徹底した画面構成は、他の山水図には見られず、同じく晩年期の「山水兼人物画」の基準作とされる「蘭亭曲水図」（クリーブランド美術館所蔵）とも異なっている。

上述した構成は、本作の主題に関係するものと考えられる。描法を変え、また雲烟で区切られたそれぞれの部分は、香爐峰と瀑布、五老峰、東林寺などに対応しており、それぞれを主題化している。本作はただ「虎溪三笑図」であるだけでなく、それを含めた廬山の全体であり、これについて知識のある鑑賞者が、複数の主題を想起することを可能にするために採られたのが、上記の描法や構図だと考えられる。「虎溪三笑」についても、慧遠の一行は橋の上に描かれており、虎溪を越えて「三笑」という定型とは異なる場面が選択されている。廬山の瀑布の前には、四阿が描かれるが、存在を期待される李白らはいない。このような趣向を含め、廬山についての複数の主題が、巧みな画面構成によって、それらの関係を含めて示されていると考えられる。

本発表では、以上のような「虎溪三笑図」の特徴を明らかにした上で、蕭白晩年期の山水図の画面構成の方法について論じてみたい。